

自然保育推進事業 活動報告書

1 団体名 学校法人 広島女学院 広島女学院ゲーンズ幼稚園

2 今年度の活動概要

(1) 環境構成に関すること



環境づくりは、可能な限り子どもと一緒に取り組むことを大切にしています。



プラスチック遊具は、できるところから土に還る素材に入れ替えをおこなっています。ぼうけんのもりから孟宗竹を切り出してきて、バケツ、スコップ、お皿を作ったよ！石油資源のない時代には、こうして身近なものから生活に必要なものを作ったんだね。



野球のスコアボードや、園庭にデッキ“あひるテラス”を作りました。

① あひるテラスづくり

あひる組の前にあった鉄製のジャングルジムを撤去して、広がった空間に、3か月の時間をかけて、たくさんの親子が力を合わせて、デッキテラスをつくりました。



一つの親子で一つの「基礎」を設えました。



むき出しの枕木が、平均台遊びになった時期もありました。



11月に始まった工事の仕上げは1月になりました。



バランスボード、床を傷つけることを気にしなくてもいいね。





お弁当を食べたり、お花をあしらってオープンカフェみたい



“あひるテラス”は、神楽やミュージカルの舞台になったり、お弁当を食べたり、ダンスボードのステージになったり。遊び環境に必要なものは、“遊ぶもの”（＝ジャングルジム）ではなく、“遊びを無限に生み出す空間”（＝“あひるテラス”）であり、遊ばせることではなく、遊びが生まれてくるための仕掛けなのだと、取り組みながら反芻しているところです。

② カラカラデッキづくり



2階デッキには、幅が狭く、往来がしにくい階段が設置してありました。



カラカラハウスは、1階が鳥小屋、2階ロフトは野生動物の標本や図鑑、羊毛手仕事の材料や道具の倉庫になっています。2階に登る階段が狭く、子どもの動く保育環境には不向きなので、まずはそれを撤去しました。



まずは、その狭い階段を外しました。





森からヒノキを切り出し、子どもたちが皮をむいて、大人たちが立てました。



ヒノキの皮むきは、子どもたちも経験豊富。どこに手を添えるといいか、体験から学んでいます。



階段状のデッキにすることで、同船が太くなり、安心・安全な上り下りができるようになった

幅が狭い階段は、安全管理の視点からも危険でした。上で何かが起こっても、保育者がすぐに駆け付けられなかったり、子どもたちが将棋倒しになりそうだったり。そこで、デッキごと階段状にして、上り下りの動線を太くしました。もちろん、そのステップを使わなくても上り下りはできます。というか、むしろそっちの方を子どもたちは楽しんでいきます。大人が一番助かっています。みんなが親しめるようになった、このカラカラハウスのデッキスペースは、隠れ家的な家族ごっこスペースや、神楽の舞台になっています。

③ ツリーハウスのステップと滑り棒設置 既存遊具（コンパン）の撤去



2018年度に園児、保護者、地域の方と協力して作った「ツリーハウス」は、完成形ではなく、子どもの遊びこむ姿を見ながら、作り替え、拡張していくことを構想していました。総合遊具（コンパン）は、経年劣化し、撤去するか、補強して少し寿命を延ばすか思案のしどころでした。撤去するとすれば、総合遊具が有している「滑り台」「ネット渡り」「滑り棒」等の機能をどう残していくか、新たな遊具をつくるか、ツリーハウスに組み込むかを考えました。





床材をカットするためにガレージに運ぶ子どもたち



穴を掘って丸太の柱を立てます



滑り棒を移設します



場所が変わると新鮮な滑り棒

二つの遊具をジョイント、この時点でもうすでに、製造業者の安全基準など、何の意味もなくなります



固定遊具を部分的に解体し、「滑り棒」は「ツリーハウス」に新たなステップをつくり、そこに移設しました。固定遊具は、補強しつつもすぐそばの丸太ログハウスとジョイントし、「綱渡り」の遊びを生み出しました。安全管理基準は、遊具製造業者が定めるととらえず、子どもと共に遊ぶ保育者が管理するという、覚悟と責任の上での判断でした。遊具を購入するのではなく、自分たちで遊具をつくる、遊び環境をつくるということは、自分たちが安全基準となるということ。自然の中で遊ぶということもこれと同じで、楽しいこともたくさんあるが、不確かなことと向き合うことであり、安全基準は保育者が持っている、子どもや自然の姿に応答しながら常に更新していくべきものであることを心に留めておきたいと思います。

(2) 特に印象的だった遊びの事例に関すること

子どもとともに環境づくりに取り組むことを大切にしているので、「(1) 環境構成に関すること」と「(2) 遊びの事例」との境界線があいまいになっています。

① 年少保育室前の遊び場づくり 専用砂場拡張とティピーテント



年少組の前は、園児通用門があり、単なる通過ポイントのような空間になっている。年少児は、この空間でなく、年中長児の保育室のあるメインの園庭に遊びに出かけている。もちろん、そちらの空間が魅力的であり、そちらで思いっきり遊んでほしいが、自分たちの保育室前の小さな空間も、魅力ある空間に作り替えていきたいと考えました。



多様化し、遊びが広がりつながるようになってきた年少保育室前空間

年少保育室前を遊べる空間にしようというプロジェクトを通して、遊べる空間とは、遊具をつくり出すことではなく、子どもの遊びたいという欲求、興味関心に寄り添うこと、子どもが必要性を感じていることを敏感にキャッチして、子どもと共に、試行錯誤しながら創りだしていくこと

② ヘビとのふれあい



シマヘビにふれる

野遊びの達人、ひろしま自然保育アドバイザー、菊間さんがシマヘビとマムシを連れてきて、その違いを伝えてくださいました。ヘビの肌には、色々な雑菌がいるから、自然の中にあるヘビは決して素手では触らないこと、触ってもあとから手を洗うこと、でも、思っているよりもさわり心地がいいことなどを、体ごとで体験させていただきました。



マムシが逃げ出さないように、焼酎のボトルの中。裏も表もみんなに見つめられて恥ずかしそう！？

③ フィールド図鑑



自然とふれあう“現場”にこそ、必要なポケット図鑑！？

かえで幼稚園からいただいたアイデアで、子どもたちが興味関心を持つ季節ごとのポケット図鑑を、保育室ではなく園庭のフィールドライブラリーとしていつでも手に取れる場所に置くこととした。

イモムシ・ケムシ、クモ、ハムシなど、従来の幼児用図鑑では主役扱いされていないものたちが、実は身近にたくさんいて、ポケット図鑑を開くと主役として登場し、実際に見つけた小さな生き物を探し出し、その生態を知ることができ、フィールドに向かう子どもたちの様々なものとの出会いをより楽しく演出してくれることとなりました。

④ そうめん流しからの遊びの展開



そうめん流しは、食べて終わらず。

そうめん流しが終わった後の竹は、そのまま素敵な遊びアイテムに変身。少し子どもたちが取り扱いやすいようにカットしますが、そのままそこらへんに投げておきます。すると・・・



砂場や年少保育室前庭やいろんなところに運ばれて・・・



水やドングリや、泥だんごやビー玉、時にはダンゴムシが転がって、流されていきました。



流れる、転がる、つながる、重力、高低差、ジョイント、段差、摩擦、仲間との協同…いろいろな要素が凝縮された遊びの世界が展開されていきました。

⑤ 農の営み、いのちの循環 土づくり～収穫～味わう



草抜き、田おこし、水はり・・・



代掻き、田植え・・・



園庭には、植えた覚えがないヤマグワが、昨年度から実り出しました。



ヨモギだんごづくり
ヨモギだんごづくり

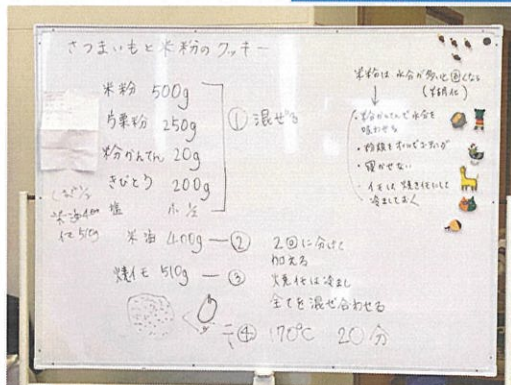




芋の苗植え、夏の草取り、そして収穫



子どもの手握り、ミニサツマイモクッキー作り



オリジナルレシピ特別公開



秋には稲刈り、一番大変な作業：脱穀、精米そして…



野外炊飯、炊き立てはおいしかった！



ヤマモモ、スモモ、ユスラウメ、グミ、ブドウ、アケビ、ザクロ、アンズ

⑥ ぼうけんのもりと野生動物たち



イノシシやアナグマ、キツネやタヌキ、イタチやテンたちが棲んでいる牛田山。昼間は、人間の子どもも遊ばせてね。



野生動物は触るのはNG！だけど、ノネズミが逃げなかったので、先生がつかまえて、元いた場所へ逃がしました。



⑦ もりのおみせやさん



木の実や木の枝、落ち葉や花びらも、こうして集めたり並べると・・・



また新たな遊びの糸口が広がっていく



⑧ 染物活動



毎年、プランタで育てていたアイタデを、今年は地植えしてみました。



豆絞りすぎー！

